



Data

監督・脚本：グスタフ・モーラー
 出演：ヤコブ・セーダーグレン/イ
 エシカ・ディナウエ/ヨハ
 ン・オルセン/オマール・シ
 ヤガウィー

👁️👁️ みどころ

人間が聴覚から得られる情報は、わずか11%。しかし、緊急通報司令室のオペレーターはその乏しい情報下で適切な指示を与え、人の生命・安全を守るのが仕事だ。この電話は、暴力亭主によって車の中に監禁され、連れ回されている妻から救いを求めるもの！車の種類は？色は？動いている場所は？さらに、男は家で子供を殺害！？すると、家にも警官を差し向けなければ・・・。

密室モノは面白い！潜水艦モノはその典型だが、本作の映像は司令室の中だけ。登場人物も基本的にオペレーターの警察官1人だけだ。したがって、観客はこの主人公と共に悲劇のヒロイン(?)の救出に懸命の努力を続けるが、もし、それが“思い込み”“錯覚”だったとしたら・・・？

見えない事件が見えてくる！これは誰も体験したことがない、新感覚サスペンス！そんな本作をしっかりと楽しみたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■犯人は音の中に潜んでいる！このアイデアに注目！■□■

わずか300万円の制作費で30億円の興行収入を挙げる大ヒットを記録し、「カメ止め」現象を引き起こした『カメラを止めるな』(17年)は上田慎一郎監督のアイデア映画だが、アイデア映画はたくさんある。私が面白かったのは『リミット』(10年)、『シネマ25』未掲載と『オン・ザ・ハイウェイ その夜、86分』(13年)、『シネマ36』251頁だ。しかし、本作のパンフレットを読めば、『セルラー』(04年)や『ザ・コール緊急通報司令室』(13年)も、そうらしい。また、直近では第34回サンダンス映画祭で本作とならんで観客賞ワールドシネマ部門を受賞した、パソコン画面だけでスリルある1本の映画

を作り上げた『search サーチ』（18年）（『シネマ 43』掲載予定）もアイデア映画だ。

人間が聴覚から得られる情報はわずか11%！そんな驚くべきデータがあるが、本作の主人公アスガー・ホルム（ヤコブ・セーダーグレン）は、緊急通報司令室のオペレーターとして今夜もコール音が鳴るのを待っていた。スクリーン上にはアスガーの横顔がアップで映し出されていく。そして、彼の頭にはマイクとヘッドフォンが一体になったヘッドセットが装着されている。受信ボタンを押すとピープ音が鳴り、アスガーは「こちらは緊急ダイヤルです」とマニュアル通り返答。すると、ゴソゴソと耳ざわりなノイズがしばらく続いた後、やがて「助けてくれ」という男性の声が。さあ、アスガーの対応は・・・？

■□■この男はなぜこの仕事を？この会話からどんな状況を？■□■

私は緊急通信指令室のオペレーターの仕事がどんなものか全く知らないが、TVでよく見る、テレビショッピングのコールセンターの風景や、さまざまな苦情処理を受け付けるコールセンターの風景と似たようなもの？いやいや、人の命や安全に関わる緊急通報を受け付ける緊急通信指令室はそんなものとは全然違うし、オペレーターも責任感と緊張感いっぱいで職務に邁進しているはず。

私は当然そう思っていたが、男からの電話が薬物を過剰摂取した挙句に助けを求めるものだと見抜いた（聞き抜いた）アスガーは、マニュアル通りに救急車を手配してやっても、結構突き放したモノの言い方で男を叱りつけていたから、アレレ・・・。その次には、勤務時間中は私用電話を禁止されているにもかかわらず、自分の携帯にかかってきた電話をとってしゃべっていたから、またアレレ・・・。その会話内容を聞いていると、アスガーには明日重要な審問の日が控えているらしいが、そのことを誰だかわからない記者からかかってきた携帯で質問されたアスガーは、「ノーコメント！」とピシヤリ。次に入ってきた緊急着信は窃盗事件らしいが、これもアスガーは手際よくマニュアル通りに処理。なるほど、緊急通信指令室のオペレーターの仕事は結構大変だなと思うものの、一晩中こんな仕事をやっていたら、いい加減ウンザリするのでは・・・。しかし、次にかかってきた女性からの電話は・・・？

アスガーの本来の仕事は警察官だが、“あること”で、“ある問題”を起こしたため、明日は相棒の警官ラシッド（オマール・シャガウィー）と共に大切な審問の日が予定されているらしい。本作の舞台は、緊急通信指令室の室内だけ。スクリーン上に登場する人物も、数名のアスガーの同僚だけだ。したがって、制作費はバカ安だし、グスタフ・モーラー監督はアスガーが起こした“ある問題”の回想シーンすら見せてくれないから、観客はアスガーの会話内容だけで勝手に（自由に？）状況を想像するしかない。しかし、人間が聴覚から得られる情報はわずか11%。乏しい映像上の情報以外はすべてアスガーの会話から想像力を駆使して状況を判断しなければならないが、さあ、そこから頭の中に浮かんでくるその想像は・・・？

■□■この女はヤバイ！さあ、俺の出番！どう動くべき？■□■

誰にでも1度くらいは、周りの人に聞かれないまま、電話口の相手だけに何かを伝えたいという経験をしたことがあるはず。そんな時によく使う手法は、相手からいろいろと質問してもらい、こちらはYESかNOだけで答えるもの。これなら、自分の周りの人にはどんな会話をしているか悟られないわけだ。

しかして、アスガーが受けた電話の向こう側では、女性が無理やり自分の娘に話しかけているふりをしている雰囲気がありあり。警察官をしているアスガーは瞬間的にそう聞き取ったから、この女はヤバイ！そう思い、全身に知恵を巡らせながら、電話口の向こうの女性イーベン（イェシカ・ディナウエ）に対して、一方では閉じ込められている車の種類や色、動いている場所を聞き出し、他方では警察に連絡をしてパトカーの手配をさせたり、獅子奮迅の働きを。その結果、激しい雨で中パトカーは被害者女性が乗せられた“白いワゴン車”を発見し捕捉できそうになったが、突然その車が高速から降りてしまったため、捕捉は失敗。アスガーはイーベンに対して「安心しろ！」と何度も言っていたが、これではそれはカラ約束に・・・？

もっとも、イーベンとの多くの会話の中でアスガーは、イーベンの自宅とそこに残されている娘の姿がイメージできていたから、白いワゴン車の捕捉とは別に、その自宅に警察官を派遣して娘を確保すべき役割もあった。しかし、アスガーの勤務時間はもうすぐ終わる上、上司からは明日の審問に向けてゆっくり休むように厳命されていたから、これ以上俺がこの事件に首を突っ込むのはムリ。しかし、あの女イーベンは何としても俺が救ってやらなければ・・・。そう考えたアスガーは相棒のラシッドなら無理を頼めると考え、ラシッドにイーベンの自宅に向かってもらうことを依頼した。当初そんな仕事にちょっかいを出すのをラシッドは渋っていたが、アスガーのたつての頼みとあれば、断れないのが相棒。やむを得ずラシッドはイーベンの自宅に向かい、アスガーの指示に従って自宅の中に入ってみたが、そこで見た“あっと驚く風景”とは・・・？

■□■これは思い込み？錯覚？すると、私たちも・・・？■□■

人間は誰にでも“思い込み”があり、“錯覚”がある。そのことを、私は最近、月に一度やっている愛光関西9期会の囲碁会で再三痛感している。つまり、こう打てば相手の石を殺せる。そう思ったのに、実はそこに肝心な“ヨミ”が欠けており、私の勝手な思い込み、錯覚だったということだ。本作が面白いのは、女から電話を受けた瞬間から、アスガーは、暴力亭主に家に踏み込まれた挙句、子供たちを残したまま無理矢理車に連れ込まれたため、必死で救いを求めている被害者の妻（イーベン）と思い込んでいることだ。電話のやり取りを聞いていると、たしかにそうかもしれないが、人間が聴覚から得られる情報は、わずか11%だからそうでないのかもしれないのでは・・・？

アスガーの電話からの指示に従って、イーベンの家の中に押し入った相棒のラシッドが、そこで見たのは、何と切り刻まれたイーベンの娘の弟の死体。もちろん、アスガーはそれをラシッドの口から聞かされるだけでその情景は見えていないが、それを聞いていると、なおさらアスガーは車の中にイーベンを監禁しながら連れまわしている亭主ミケル（ヨハン・オルセン）の凶暴さが手に取るようにわかったはず。こりゃ、少しでも早くパトカーを差し向けてイーベンを救出しなければ・・・。

アスガーがそう考え必死で努力していることに私たち観客も共鳴し、アスガーと一緒にあってそれを応援しているのだが、ひょっとして、それが“思い込み”“錯覚”だったとしたら・・・？

■□■加害者？それとも被害者？そのミスの大きさは？■□■

大阪弁護士会が「弁護士は、依頼者を守るために徹底的に向き合います。」のキャッチコピーで応援した映画が、是枝裕和監督の『三度目の殺人』（17年）だった。そこでは、役所広司扮する強盗殺人の被告人のコロコロ変わる供述に福山雅治扮するエリート弁護士が振り回される情景は印象的だった（『シネマ 40』218頁）。また、原田真人監督の『検察側の罪人』（18年）は、司法研究所の検察教官まで務めた木村拓哉扮するエリート検事が、ある老夫婦刺殺事件で異様なまでに犯人逮捕に入れ込む情景の異様さが目立っていた（『シネマ 42』41頁）。

これらを見ていると、いかに優秀な弁護士や検事でも、“思い込み”や“錯覚”の怖さがあることがよくわかる。すると、本作では、ほぼ全編スクリーン上に出ずっぱりの警察官で、明日は重要な審問に行かなければならないアスガー程度のレベル（？）なら、イーベンからこんな緊急電話を受ければ、こんな風に思い込み、錯覚していくのは当然・・・？そう思えなくもないが、加害者を被害者と思いついたり、逆に被害者を加害者と思いついたりしたら、そのミスの大きさは？徐々にネタバレしていく（？）本作では、アスガーが犯したそんなミスの大きさを他人ゴトと思わず、私たちだってきっと同じミスをしてはいたはずだ、という反省の気持ちをもって見守りたい。

なお、本作はあくまでアスガーがイーベンを救い出すために奮闘する物語だが、同時にラストでは、明日の審問に向かうアスガーの“ある新たな決断”もハッキリ描き出されるので、それにも注目！すなわち、アスガーは明日相棒のラシッドと共に審問に赴き、しっかり口車を合わせた供述で審問を乗り切る計画をたてていたが、イーベン救出のために苦しみもがき、結局大変なミスをしてしまう中で明日の審問に向けて新たな決断を下すことになるが、それは一体なぜ？「見えない事件が見えてくる」。「これは誰も体験したことがない、新感覚サスペンス」。そんな本作の醍醐味をしっかりと味わいたい。

2019（平成31）年3月8日記